

巻き戻りした悪役令息は
最愛の人から離れて生きていく



平民街へ追いやつた。

ユリウスの側近。
一度目の生ではアリストルを

ハイノ

一度目の生でユリウスが
愛していたという令嬢。
しかし、今世では何やら様子が
違うようで……？

イレーネ

命を落とした教会で働いている。
一度目の生でアリストルが
創世神教会の司教。

アリストルの
婚約者にして王太子。

一度目の生ではアリストルを冷遇
していたが、なぜか今回は
アリストルを
気にかけている。

アリストル

婚約者ユリウスの
愛する女性を害そうとしたとして
断罪され死に戻った悪役令息。
二度目の生ではユリウスの幸せを
邪魔しないと
決意する。

C A R A C T E R S

プロローグ 世界の終わりにくちづけを

大陸北西部に位置するゼーレンヴェンデ王国。

王都エールデンの平民街外れにある、打ち捨てられた小さな礼拝堂。長年手入れのされていない廃教会は、至るところが朽ちて、このまま誰にも知られずに崩れていのを待つているようだ。

ギィイイ……

蝶番^{ちょうび}が鏽びて、かろうじて閉じられた扉から、悲鳴のような軋^きむ音が堂内に響く。

暮れゆく夕陽に影がゆらりと浮かび、慣れたように中へと滑り込んだ。

その姿はさながら幽鬼のようで、骨と皮だけの体躯と落ち窪んだ双眸は濁つた緑の瞳をした、比較的若い男性と分かる人物だった。その名は、アリストル。街の人間に最も嫌われた元貴族の青年だった。

「……ゴホッ、ゲホッ」

外から吹き込んだ風で凌^{さら}われた埃^{ほこり}が侵入者を襲い、耐え切れず濁つた咳^{あふ}が溢^{あふ}れる。ひときわ強い咳が喉^{ほの}から迸^{はげ}ると、ゴボリ、と生ぬるい塊^{くず}が押さえていた掌^{てのひら}を濡らしていった。

途端、埃の匂いに混じつて鉄の匂いが周囲に漂う。こここのところ咳き込むたびに血を吐いてしまう。たぶん肺も壊れているのだろう。

アリストルは汚れてくすんだシャツの袖で、血で汚れた口元を拭う。ふう、と深い息を吐き、ふらつく足取りで祭壇へと近づいていった。

一步、また一步、自身がつけた足跡を上書きし、正面の花園に囲まれた神の姿を描いたステンドグラスへと近づいていく。その間にも血の混じつた咳で足を止めてしまう。しかし、アリストルはそれでも神の御許との距離を縮めようとした。暮れゆく陽を背に、微笑む神へと縋るよう。呼吸すらつらくとも、体のあちこちが軋んで痛くとも、それでも足を前に踏み出した。

ヒュウヒュウと喉が悲鳴をあげても、少しでもかの姿の近くに居たくて、よろめきながら足を前に出す。

この廃礼拝堂は、何もかもを失ったアリストルが、一縷の望みをかけて見つけた住處。崩れた床や長椅子の間をすり抜け、ステンドグラスと祭壇の合間で、丸くなつて眠るようになつて二度目の冬を過ごす。

「……あつ！」

飛び出した床板の端につまづき、まともに栄養の取れていないアリストルは、なすすべもなくもんどうりを打つ。間近にあつた埃を直に吸つてしまい、激しく咳き込み、吐血を繰り返した。

（喉や背中、胸も痛い。もうずっと食べたり、飲んだりしてないからか、力も出てこない）

最後に食べたのは、貧困街のゴロツキに騙されて渡されたパンと水。カビが生え、泥水を薄めた

水だつたとしても、命を繋ぐために食べた。結果、嘔吐と下痢に悩まされ、やつと起きることはできたものの、例年より寒い日が続いていたせいで路上には残飯すら出なかつた。

倒れた衝撃からか、アリストルの乾いた唇が切れ、ジワリと血が滲む。舌で浮かんだ血を舐め、弱つた腕に入れて起き上がろうとする。しかし、弱りきつた体は少し持ち上がるものの、すぐに床に突つ伏してしまつた。

それでもアリストルは、尽きようとする力を振り絞り、体を前へ前へと這つていく。少しでも神の傍で眠りたいと、本能がアリストルの体を動かした。

積もつた埃の上を、花園に囲まれた神を描いたステンドグラスへと近づいていく。よろめく足取りで。光を背に見下ろす神へ縋るような厳かな気持ちで。アリストルは眩しそうに目を眇めながらも距離を縮めていく。

アリストルは罪人だつた。王太子の愛し人に対し、悪意でもつて愛し人を害そうとした。だからアリストルは王太子の婚約者の立場を追われ、元々良好ではなかつた実家から除籍され、举句何もかも奪われ平民に堕とされた。

違う。自分はそんな事をしていない。ただ、彼女に貴族として自覚するべきだ、と諭しただけだ。だけど、だれもアリストルの声に耳を傾ける者はいなかつた。それは、アリストルの婚約者だつた王太子も一緒。アリストルを糾弾し、男の婚約者なんて気持ちが悪いと唾棄した。それを望んだのは、そもそも王族側だというのに。

周りは敵しかいなかつた。男も女も、年上も年下も、誰もがアリストルを嫌悪し嘲笑した。貴族子息が同性の王太子の婚約者など異質で、奇異だと。異物は排除される。

アリストルは初めてまともに相対したユリウスへ、執着にも似た思慕を抱き、それが亦慕と昇華するのに時間はかからなかつた。破滅の一歩だと気づかずに、アリストルは純粹にユリウスに恋をして……地獄に墮ちた。

数歩の道程を這うようにして神の御許までたどり着くと、アリストルはステンドグラスを見上げる。不摂生な生活を送つてゐるせいで、視力も弱つてゐるようだ。

暮れゆく太陽は赤く色づき、まるで血染めのようだと感じながらも、霞んだ視界で目を凝らして眺めている。

何かに守られているのか、鱗ひとつない玻璃の絵。色とりどりの花に囲まれて佇むひとりの人物。それは世界の殆どで信仰される始まりの神、エルリューゲン。

月色の髪と蒼天の瞳の神は、慈愛の微笑を浮かべてアリストルを見つめている。万人を見守る穏やかな春色の青空の目。

（……ああ、やはりの方によく似てゐる）

脳裏に数年前の姿のまま止まつた最愛の人の姿が浮かんだ。

きっと今も彼の人は、神のようになつてゐるだろう。

（会いたい……でも、もう二度と会えないし、多分、そこまで生きていくのは無理だろう。自分の命が尽きているのを自覚している）

アリストルは目を閉じ、目蓋の裏に浮かぶ彼の人に思いを馳せる。

思い出すのは、穏やかに微笑む姿ではなく、厳しい顔で激高する姿ばかりが浮かぶ。かたわらに美しい男爵令嬢を侍らせて。その存在を守るように、春の空の瞳は凍てつく氷の瞳となつて、アリストルを鋭く睨む。長い間、何度も見続けてきた冷たい目だけが、アリストルの記憶の全て。

きっと、彼はアリストルを嫌つていた。自覚もしてゐた。だけど。

（しあわせを願うなら自由……だよね）

弱つた体を叱咤し、床に這い蹲る体を起こして、震える指で祈りの形を作る。煤けた額を組んだ指に押し当て、ただただ彼の人の永遠のしあわせを祈り続ける。

『男の婚約者なんて吐き気がする！ 二度と私と彼女の前に姿を現すな!!』

脳裏に浮かんだ柳眉を嫌悪にひそめてアリストルを糾弾するあの日の光景。その姿は心底アリストルを嫌悪しているのがありありと分かり、微妙にあつた恋情が粉々に砕け散つた。

傷心のアリストルに向けられたのは悪意だけではない。そもそも愛情さえなかつた父も、簡単にアリストルを見放した。庇えば自身の立場を危うくすると判断したのだ。

放心状態のアリストルは、少しだけの金貨を握らされただけで、市井に放り出された。手の中の小さな革袋に入つた金額は、貴族子息だつたアリストルが生きていくのに到底足りないものだつた。その少ない金も、あつという間に、騙され奪われてしまつた。

因果応報の自覚はある。

彼の人の愛する人を傷つけ、何度も仲を引き裂いたと言われたアリストルは、貴族子息から平民へと墮とされた。彼の人の愛する人は平民たちから憧れの対象となり、その彼女を虐げたと流布されたアリストルに対し、皆、敵意を隠すことなく向けてきた。

暴言ならまだいい。足を引っ掛けられたり、石を投げられたりはしょっちゅうで、酷い時は物陰で暴力をさんざん振るわれた。

傍観していた者も、嫌われ者のアリストルに冷酷だった。からうじてかき集めた銅貨で物を買おうとしても売つてはくれず、そのあたりに生える草や濁つた水、貧困街で騙されて買うことになつた腐つた食べ物で生きてきた。それはアリストルから生きる意味を奪うには十分の罰だったといえよう。

白銀の美しかつた髪は艶もなくボサボサで、頭を洗う機会も少なく、血と脂に塗れたまま。白磁の肌も垢の浅黒さに変わり、栄養のない腕は枯れ木のように細い。

たつた数年で美貌の侯爵子息は浮浪者に変わり果て、昔の彼を知る人が見ても、アリストルとはわからないだろう。

（きっと、あの方も僕の今の姿に気づかないだろう）

彼の人がアリストルを見かけても、路傍の石を見るような視線しか投げてこない。それでいい。

それだけのことを、アリストルは犯したのだから。

好きだから。彼の人の婚約者だから。侯爵子息だから。

男爵令嬢ではなく、侯爵子息の自分のほうが、彼の人に相応しい。故に排除するべきだ。

貴族子息だつた自分は、ひとつの疑問すらなく、それを当然と思っていた。

間違つていないと、自分は正しいと勘違いして、彼の人の周りから人を排除していくつた。

だつて自分は彼の人の婚約者なのだから。そうするべきだと疑つていなかつた。

何度周囲の善意ある人がアリストルを諫めて、小さな箱庭で最小限の知識しか与えられなかつたアリストルの耳には届かなかつた。

（その結果が、今の僕なのだけど……）

断罪され、実家からも追い出され、身分も奪われ。地獄に墮ちてはじめて、アリストルは自身の罪に気づいた。だから人から忘れ去られた礼拝堂で祈る。自らの罪と、彼の人のしあわせを願う。

いつか彼の人が王となり、男爵令嬢は王妃となり、正しく美しい國にあればいいと希う。

それは何もなくなつたアリストルに許された唯一のことだつた。

ふわり、と頭を撫でられる感じがして、閉じていた目を開く。

目の前は夕日が沈む間際だというのに、なぜか赤く、朱く染まつていて。

つう、と頬が濡れた。枝のような指で拭うと、べつたりと赤がまとわりついている。そこで思い出す。教会に来る直前、男爵令嬢を崇拜する浮浪者が投げた石が、頭にいくつかぶつかつたことを。そのひとつが頭皮を切り、血が溢れたのだろう。

アリストルは構わず美しく罪人を見下ろす神を見上げる。血が目に入り、その姿はどんどん霞ん

でいくけども、彼の人を思い無心に祈り続ける。悲しい出来事が彼の人に降りかからないようにと。アリストルは自分のことではなく、自分を切り捨てた相手の幸せを願い続けた。

（ああ……目が暗くなってきた。だけど、最後まで彼に似た神の姿を見ていたい）

肩や背中が冷たく濡れた感触と共に、体の熱が薄れていくと分かつても。

もう起きていることもできず、埃の積もる床に這うように倒れても。

赤く染まる目が全てを歪め、見えなくなつてきても。

アリストルは願う。

もう二度と会うことのできない、かつての婚約者の多幸を。

願う。望む。ねが希う。念ずる。祈る。

どうか、どうか、しあわせであれ、と。

命の灯火が消えていくその時まで、アリストルは愛する人の幸福を哀願し続けた。

「アリストル！」

今、まさにアリストルの命が消えかけようとした刹那。床に倒れ臥し、それでも濁った目で神を見るアリストルの名を叫ぶ声を耳に感じた。目も殆ど見えず、耳もぼんやりと聞こえている状態で。それはまさにアリストルが聞きたいと願つていた、もう二度と聞くことはないと思つていた愛おしい人の声音だった。

思いが強すぎて、幻聴まで聞こえるようになったのかと、アリストルは唇を歪める。こんな街の片隅にある小さな廻礼拝堂で、高貴なる彼の人が声を震わせて自分の名を叫ぶなんて有り得ないのだ。

あんなに冷たい声で婚約破棄を言い渡した彼が、今にも泣きそつな声で叫びながら名を呼ぶなんて……ない。だからこれは自分の燃えつきようとする命の灯火が見せた願望。そう……思つていたのに。

「アリストル！ ああ、なんてことだ……！」

駆け寄る足音と、悲嘆に暮れる懐かしい声と、抱き上げる力強さと温もりに。死にゆく自分へ、神が与えてくれた最後の夢。

「……ゆ……り、う……す、さ」

掠れた声が愛おしい人の名を紡ぐ。すると、彼の人はアリストルの骨と皮になつた体を抱きしめる。手加減されたユリウスの腕は、熱いほどに温かく、微かに震えていた。

「アリストル！ 逝かないでくれ、アリストル！」

濡れたような声で、むかし彼が一度も呼ぶことはなかつた愛称アリストルが途切れで聞こえ、なんて都合の良い夢だと乾いた唇が笑みに歪む。

好きだった。冷たくされても、あなたが恋しかった。あなたが自分の方を見ていても、あなたが彼女を愛していたとしても、あなたの笑顔を見ているのを幸福だと思つていた。できれば、一度でもいいから、あなたの声で「アリストル」って呼んでくれたらと、秘かに願つていた。

(「だけど……夢だとしても、こんなに嬉しい夢はない）

これまで熱のこもった声でアリストルの名を、彼の人から呼ばれる記憶なんてなかつた。だけどアリストルは、どんな感情のある声でも自分の名前を呼んで欲しかつた。夢とはいえ、こうして呼びかけてくれるとは。なんてしあわせなのだろうと、アリストルの骨の浮かんだ胸は温かくなつた。ごぼ、と血が溢れる。濁つた眼から涙が滔々と流れ、血と混じつて顔を濡らしていく。止まらない。命が溢れて、流れて、消えていく。

お願いです、神様。この恋愛までも、流れで消えていかないで。死の瞬間まで、彼の人を思い続けることを許してください。

「かみ……さ……ま、あ、りが……と。ゆり、う、す、さま……あ、い」

愛しています、と唇を動かしたが、果たして、彼の人に届いたのだろうか。

落ち窪んだ目尻から、透明で美しい涙が頬を流れていった――。

一 巻き戻つた世界

侯爵令息のアリストル・エルネストは、婚約者で王太子であるユリウス・ゼーレンヴェンデから断罪されたのち貴族籍を廃され、平民堕ちの果てに飢えと怪我が原因で廃礼拝堂にて命の火を消した……はずだった。

「……え？」

新緑の瞳を開いた途端、間の抜けた声が自然と溢れていた。

ボロボロの廃礼拝堂にある、エルリューゲン神を描いたステンドグラスに、見下ろされているはずだった。だが今、アリストルの視界の先にあるのは、柔らかな金の髪の合間から見える春空の双眸だったのだ。これを驚かずして何に驚けばいいのだろうか。

その春空は、アリストルが最期に見た景色。死して尚、またまみえることができたとは。

「ユリウス殿下……？」

「大丈夫？ アリス」

思わず目の前の高貴なる人の名を呼べば、安心したように蒼天の瞳を細めて、ユリウスが安堵の吐息をこぼす。初めて見る表情を、アリストルは訳が分からず混乱した。

(これはどういった状況なのだろう。それに“アリス”って……）

まともらない頭で現状を思案しながら、アリストルは寝ていた体を起こす。どれだけ寝ていたか分からぬが、体の血が下がつてクラリと眩暈がすることから、結構な時間が経っていたようだ。不安定な血の巡りを落ち着かせるように、ため息をひとつ落として「大丈夫です、ユリウス殿下」と、視線を合わせず謝罪をする。

アリストルの行動を見たユリウスの春空の瞳が、わずかに曇つたのにも気づかなかつた。かつてアリスト、と呼んで欲しいと願つたのは、アリストルからだつた。だけどユリウスは一度として『アリスト』と呼んでくれることはなかつた。

「あの……ここは？」

白で統一された室内は、静謐な中にも華やかさがある。ベッドも清潔で、シワひとつない。しかしどこにも見覚えがなく、質問がこぼれ落ちる。

「ああ、この部屋は教会内にある、王族用の貴賓室だよ」

王族用の貴賓室、と口の中では呟く。だから室内の隅々まで手入れが行き届いているのかと、納得できた。

「そんな場所を、僕が利用してもいいのでしょうか」

「大丈夫。……アリスト、顔を上げて」

「は、い」

俯いていたかつたが仕方がない。アリストルはキュッと唇を噛み、顔を上げる。すぐ近くにユリウスの整つた尊顔があり、胸がドキリと震えた。

「君はどうして、ここで寝ているのか、覚えている？」
「……いいえ」

目を伏せ言葉を返すと「そうか」とユリウスが静かに言い、アリストルの現状を教えてくれた。

婚約式の最中、突然倒れたという。そこでアリストルはとある事に気づく。どうして“また”ユ

リウスと婚約式をしているのだろう、と。

「婚約式は……」

なぜ、再び婚約式が執り行われたか分からぬ。だが、婚約が成立したのなら、アリストル側から婚約を解消するすべはない。

「つつがなく締結した。つまり、アリストと私は正式に婚約したことになる」

淡々とユリウスが説明するのを聞きながら、アリストルの体から血が引く。絶望を詰め込まれたようになつた。

（もう、婚約が成立していたなんて……）

成立したものを、格下のアリストルから覆すことはできない。

そもそもこの婚約は仕組まれた物だ。断れば不敬罪として、侯爵家であろうとも、一族郎党が処刑されるだろう。ユリウスとアリストルの婚約を画策した人物は、それだけの力を持つていた。

（この婚約の意味は分からぬ。でも、またあの断罪が繰り返されるのなら、それまでにどうにかしないと……）

脳裏を悪夢がよぎる。

元々、淡々とした婚約関係だったが、男爵令嬢が現れてから、ユリウスの態度が如実に冷たくなった。同時に、アリストテルが憤りから、男爵令嬢を虐めたとどこから噂が立つようになった。

（このままだと行き着く先は、あの地獄のような日々だ）
断罪された理由が事実であれば、自業自得としか言いようがないが、アリストテルは男爵令嬢に何もしていらない。にもかかわらず、反論する間もなく糾弾され、平民に墮とされたのだ。まるでそういうことが最初から決められていたかのように。

（そんなのは嫌だ……）

恐怖にアリストテルは自らの体を抱きしめる。

婚約が成立した以上、ユリウスから婚約を白紙、または破棄を切り出すしか道がない。

（穩便に婚約を解消するには、どうしたらいいのか）

王家からユリウスとの婚約を申し込まれ、父に厳命されて、アリストテルは承諾してしまった。王太子の婚約者という立場から、短絡的で居丈高だったのは嘘ではない。だからといって、ユリウスは男爵令嬢と恋仲になつた挙句、アリストテルに謂れもない罪を着せて断罪した。そのためアリストテルは全てを奪われ、ボロ布のような姿で、朽ちた街の礼拝堂で生を終えた。

本当にアリストテル自身は、そこまでの大罪を犯したのだろうか。ただ、自分はユリウスと幸せになりたかつただけだ。

「アリスト？ どうかした？」

苦い思いを飲み込み、窺つてくるユリウスに淡い笑みを浮かべて「なんでもありません」と答える。

る。そして。

「申し訳ございません、ユリウス殿下。まだ少し眩暈が……」

俯いたまま毛布を握り締め告げた。

「そうだったね。ゆっくりと休んでから、ハイノと一緒に王城へ向かえばいいよ。私は先に戻つているから」

「ありがとうございます」

アリストテルは、始終ユリウスと視線を合わせないよう、ずっと俯けていた。目を合わせたら、心が揺れてしまう。一度でも好きになつた人なのだ。それも、二度と会うこともないはずだった人なのだ。死の直前に幻まで見た人なのだ。

これ以上ユリウスに惹かれてはいけない。そして、胸が痛くても、男爵令嬢との仲を裂くようなことは絶対にしない。

ユリウスがアリストテルに冷たくなつた時点で、誰かに相談して婚約を解消する努力をしよう。そうして、ユリウスたちの前から消えてしまえばいい。

だけど。

「おやすみなさい、ユリウス殿下」

男爵令嬢の存在が出てくるまで。少しの時間でいい。ユリウスと同じ時間を過ごすことを許してください。

アリストテルは閉じていくドアの隙間から見えるユリウスの背中に視線で懇願していた。

◇ ◇ ◇

夢を見た。

まだ死ぬ前の……貴族子息だつた頃の懐かしい夢。

——これからよろしくお願ひします、ユリウス殿下。わたしのことはアリストとお呼びください。冷え冷えとした教会での婚約式を終え、アリストの身分が準王族になつたため、王城に滞在するようになつてすぐ、交流のために催されたお茶会の場で、アリストは不機嫌なユリウスに相対していた。

広々とした庭園は初夏の花が競い合うように咲き乱れ、湿つた風に乗つて甘い香りを漂わせていく。優美なユリウスにとても似合つていたが、その彼はアリストから目を逸らして茶を嗜んでいた。この婚約は王族として異例の物だつた。普通は王族ならび貴族の婚約や結婚は、異性同士が通例だからだ。では何故、王太子ユリウスの婚約が同性であるアリストになつたのかは、ユリウスの出自に関係していた。

ユリウスは、王太子という立場であるものの、彼は正妃の実子ではない。父は現王エメリヒだつたが、母は王妃の侍女として勤めていた伯爵令嬢だつた。長年王妃との子宝に恵まれなかつたことと、癪持ちの王妃との生活が嫌で、王はこともあろうに若い侍女に手を出してしまつた。

そうして誕生したのがユリウス。長子が王太子になるのが決定づけられているせいで、必然的に

ユリウスが王太子となつた。彼を産んだ侍女も側妃となり、離宮のひとつを与えられた。

側妃が先に王太子を産んだ。この歪んだ誕生は、王妃の怒りを募らせるのに十分だつた。

その日から側妃とユリウスは命の危機に晒される日々が続く。冷遇から始まり毒に暗殺にと、あらゆる奸計が母子に降りかかつた。そんな状況にも拘らず、エメリヒからの救いの手はなく、ユリウスが六歳の時に毒によって側妃は傍くなつてしまつた。

王妃の逆鱗に触れるのを恐れ、ユリウスには後ろ盾がなかつた。何度も命を危ぶまれたユリウスは当然ながら人嫌いになり、母に与えられた離宮でハイノをはじめ、極少数の人に囲まれ生活をしてきた。

ハイノの父は現王の実弟で、彼の妻はユリウスの母とは遠戚関係にあつた。その縁で王妃の魔の手から守るため、ユリウスの右腕として侍るようになつたと、前の生で誰から聞かされた。

このままユリウスは王太子から王になり、女性を娶るはずが、納得できない王妃が阻んできた。

ユリウスが生まれた二年後に王と王妃の間に王子が誕生していた。ユリウスという存在がなければ、彼が正式な王太子になつていたはずが、現実は先に生まれたユリウスが王太子になつてゐる。王妃を含め、彼女の実家であるフリューリング公爵の奸計により、王にひとつの提案がなされた。

高貴なる王の血脉に、家格の低い伯爵家の血を混ぜてはいけない。ユリウスが王になるのは百歩譲つて許しても、次の王になる者の血にユリウスの血を混ぜるのを、貴族たちは許さないだろう。だからユリウスの伴侣には男性を立て、決して子を生ずるのを許さない。

本来なら勝手な言い分を放つ王妃を諫めるはずの王も、後ろめたい感情があつたのか、王妃の主

張を受け入れるしかなかつた。そうしてユリウスにあてがわれたのは、フリューリング公爵と親戚関係にあつたエルネスト侯爵家子息、アリストルだつた。

アリストルはエルネスト侯爵と隣国の公爵令嬢との間にできた子供だつた。そもそも政略的意味合いのある婚姻。当初から冷えていた関係に加え、他国での生活に実母の体は弱つていつた。彼女はアリストルの出産と同時に儂くなり、アリストルは使用人たちによつて育てられた。

というのも、エルネスト侯爵には長く交際していた子爵令嬢が存在し、前侯爵から結婚を反対されていた経緯がある。前侯爵はアリストル誕生後、夫婦揃つて流行病で亡くなつた。それを好機と喪が明けてすぐに再婚した。ふたりの間に子供が生まれ、アリストルの立ち位置はあつという間に挿げ替えられてしまつた。

だから、似たような環境で育つたユリウスに対し、アリストルが惹かれていつたのも仕方ないだろう。

同性である以上、決して実を結ぶことはできないにしても、絆を結ぶことはできる。アリストルは婚約してから歩み寄る姿勢を見せ続けたものの、ユリウスは同性の婚約者に対して冷たい態度で返すばかりだつた。

——あの春色の空に僕の姿を映してくれたら……

小さな願いは叶うことなく、ユリウスの心はひとりの男爵令嬢へと向けられるようになつた。

出会いは思い出せない。気づけば、ふたりで王城の庭園でお茶を楽しんでいたり、時にはハイノと三人で和氣あいあいと会話をしていたり。本来ならそこはアリストルの場所だつたはずなのに、

アリストルは傍観するしかできなかつた。
元々アリストルの立ち位置は不安定だつた。王族や貴族の婚姻にありえない同性の婚約者。それも次期当主の座を義弟に奪われた情けない令息。王太子に望まれない哀れな王太子婿候補。
いくらアリストルがユリウスを慕つていたとしても、相手が受け入れなければ、ただの一方通行。
——ただ幸せになりたかったのに……
結局、死ぬ直前まで叶うこととはなかつた——

◇ ◇ ◇

ガタンツ、と衝撃が体を揺らし、ぼんやりしていた意識が鮮明になる。前の時の夢を見ていたようだ。同時に、今いるこの時は、なにかの原因で時が巻き戻つたらしい。正直自分の頭を疑つてしまふが、どうやら現実らしい。

「エルネスト侯爵令息どの、大丈夫ですか？」

正面から声をかけられ、アリストルは声の方へ首を動かす。ユリウスの側近で、前の生の時にアリストルを平民街に送つた人物。ハイノ・ヘルプスト公爵令息が、心配を顔に浮かべてアリストルを見ていた。

ヘルプスト公爵は現王エメリヒの実弟で、現在は宰相として陛下を支えている。臣下にくだつた際、ヘルプスト公爵令嬢と婚姻を結んだ。ハイノはヘルプスト公爵の三男で、ユリウスと同じ歳の

ため、幼少期から行動を共にしていたそうだ。いわゆる幼馴染という関係らしい。

それ故か、ユリウスの環境に同情し、アリストルの立場に批判的だつた。加えてハイノはユリウスと恋仲の男爵令嬢に惹かれていたのもあつて、特にアリストルに対しては冷ややかな態度で接していた。

「ありがとうございます。大丈夫です、ハイノ様」

いくらアリストルが王太子の婚約者になつたといえども、自身は侯爵子息なのは変わらない。対してハイノは公爵子息。最高位貴族に対する礼儀をもつて接するにかぎる。

前の生では、エルネスト侯爵家の問題で、アリストルにはまともな教育を得る機会はなかつた。そのため、準王族になつたという妙な自信のせいで、傲岸不遜な性格になつてしまつた。それがユリウスとの関係に溝を作つていたのは頭で理解していたものの、人と接する機会のなかつたアリストルには、どうしたら改善できるか分からぬままだつた。

しかし、準王族として王城の一室を与えられ、王族教育を受けるようになるとその自信は消失した。自分の行いが失礼で咎められてもおかしくないものだつたと。穴があつたら入りたいと、何度も思つたことだらうか。

含羞と教育の記憶が残つていたおかげで、ハイノに対しても間違つた対応はしていないと信じた。卑屈さが滲んでしまうのは、過去の関係性のせいだ。

「いいえ。倒れたのですから、城に戻つたらすぐにおやすみになつてください。陛下との謁見は明日に変更しますので」

「そ、そんな。陛下もお忙しいのに……。僕のことなら大丈夫です。当初の予定通り、陛下に謁見します」

前の記憶通りなら、入城してすぐにエメリヒ陛下との謁見の時間があつた。だが数言、言葉を掛けられてすぐに終わつてしまつたので、そこまで体に負担はないだらう。

「分かりました。ただ、一度ユリウス殿下に尋ねたうえで決めますが、よろしいですね」

「はい。ハイノ様も多忙なのにすみません」

実際、ハイノはユリウスの補佐をしている。忙しさはユリウスと同等なはずだ。彼の手を煩わせてしまつたことに消沈していると。

「エルネスト侯爵令息どの、こういつた調整もわたしの仕事なので心配なく。まだ王城に着くまで、少し時間があります。その間は体を休めてください」

アリストルを気遣う言葉が投げかけられ、俯いていた顔を上げてしまう。視線の先にあつたのは、かつてアリストルに見せていた無表情ではなく、穏やかに微笑む淡い濃紺の髪と灰青の瞳を持つ青年の姿だつた。

ユリウスもさうだが、ハイノの態度も前とは違ひすぎて、アリストルはただただ困惑するばかりだ。ただでさえ、自分が死んでから時間が巻き戻つたうえで生き返つたことに、理解できていないのに。次から次へと前の生とは違う状況が舞い込み、アリストルはまたも脳処理が追いつかなかつた。(よく分からぬけど婚約が成立した以上、前と同じ展開になるなら、男爵令嬢とユリウス殿下は出会うはず。断罪される未来を回避できないのなら、今度はあんな寂しい死にならないよう、今か

ら動くべきだよね)

石畳を回る馬車の音色を聞きながら、アリストルは決意に手を小さく握った。

婚約式を執り行つた大聖堂は、平民街の東端にあり、近くに大きなシルト川が流れている。川の水の終着点は、フリューリング公爵領にあるブラウ湖で、貴族たちの避暑地として有名だ。また、このシルト川は、王城と貴族街、平民街と貧困街を隔てているため、自然の要塞の役割を担っていた。

アリストルは賑わう街並みをぼんやりと眺めている。積雪地帯のため、傾斜のある屋根が特徴で、焦げ茶の木組みと漆喰の白壁の建物が並ぶ。煙突から白い煙がゆらゆらと空に昇り、とても長閑だ。このあたりの建物の屋根に傾斜があるのは、雪が降つても自然と落ちるようにだ。尖った屋根が並んでいるのが、可愛いと感じる。

区画によつて軒を連ねる店の業種は変わつてゐるが、王城や貴族街に向かう橋が近いこのあたりは、噴水広場があるためか食料品関連の店が多い。ユリウスから婚約破棄される前は、ほぼ王城から出たことがないため、自由な時間を過ごす人々が眩しく見えた。

昔のアリストルが広場に近づくと、人々は鼻に皺を寄せるだけでなく、時には石を投げることもあつた。みすばらしい姿も理由のひとつだらうが、大半の理由は、アリストルが街の鼻つまみ者だつたからだ。

(彼女は平民街の人気者だつたから)

平民街にある孤児院で手伝いをしていたり、貧困街では炊き出しをしていたり。ほぼ平民と変わらぬ男爵家に、そこまでの資金があつたのか不明だつたが、彼女はかなり頻繁に慈善活動をしてい

たと記憶している。

ユリウスは心優しい男爵令嬢に心惹かれ、次第に恋仲になつていつた。そしてアリストルの存在を疎ましいと感じるようになつていつた。この婚約が、ユリウスの命を守るための方法だつたとしても、彼は自分の心に素直に従つたのだろう。結果、アリストルひとりが絶望の淵に突き墮とされるとしても。

「エルネスト侯爵令息どの？」

「^{いぶか}詠るようなハイノの声が聞こえ、思案に暮れていたアリストルは、ハツと我に返る。

「顔色がすぐれないようです。やはり、まだお体が……」

「いえ、大丈夫です。お気遣い、ありがとうございます、ハイノ様」

「ですが……」

「それから、僕のことはアリストルとお呼びください。家名はあまり慣れてないので」
「こりと微笑むと、ハイノは苦い物を飲み込むような顔をして「分かりました、アリストル様」と応えた。

馬車がそろそろ橋に差し掛かる頃、窓から見えた光景に、アリストルは慌てた様子で「馬車を停めてください！」と叫ぶ。

唐突の指示に馬が嘶く中、アリストルは扉を開き、外へと飛び出した。

「アリストル様!?」

背後からハイノの諫める声が聞こえるも、アリストルは構わず広場の一角へと駆けていく。目的

はならず者たちの集団だ。彼らは何かを囲むように立ち、見下ろしている。周囲は不穏な空気を感じてか、足早に避けていた。

「その者たち、一体何をしている！」

アリストルは声を張り上げ、集団に詰問する。男たちは一瞬ギョッとした表情を浮かべたが、その叫んだ人物が華奢な貴族の男だと分かると、目線を交わしてニヤリと嗤つた。下卑た笑いに薄気味悪さを覚える。

彼らの足元には、白い神官服を着た男性がうずくまつっていた。フードを深くかぶつて、表情を観る事はできない。

「いやいや、誤解ですつて。俺たちは神徒さまがうずくまつてしまつたので、心配して声をかけたんですよ」

「そりや、俺たちはお貴族さまから見たら、底辺の庶民ですけどね。体調の悪い人に、何かしようなんて考えありませんよ」

言葉とは裏腹にニヤニヤ嗤う男たち。言い分と本心が正反対だというのが明白だ。

貧困街の一部の住民は、ひ弱な人間を攫つて奴隸として売るといった悪事を働いている。前の時には、アリストルも何度か狙われたものの、汚く痩せ細つた姿に商品価値はないと知り、代わりに到底人が食べられない物を売りつけてきた。おかげでアリストルの寿命は加速して縮んでいった。アリストルはチラリと男たちを見遣り、それから静かに神官服の男性に近づき、彼の前に跪く。

「……神徒様、彼らの言うことは本当でしょうか」

素早く目の前の人を確認する。長衣のあちこちに汚れが付着していて、体調が悪い人を心配しているという彼らの言葉に疑問を持つ。アリストルからの質問に、神官服の男は曖昧に頷いた。きっと否定すると、アリストルまで巻き込むと思っているのだろう。

「ご協力感謝します。僕がこの方を診療所へ連れて行きますので、ご安心ください」

「お貴族さまの手をわざわざするわけにはいきませんから、俺たちがこの方を連れて行きますよ」

男たちの表情のどこにも神徒を察じる様子はない。むしろ、神徒を舐めまわすように見ている。

それはアリストルにも波及していた。

「大丈夫です。あなたたちに、この方の診療代の負担を掛けさせるのは、心苦しいですから」

隙は見せてはいけないと、毅然とした態度で言い放つと、うずくまる男性をゆっくりと立たせて去ろうとするが。

「待てよ。人の好意を拒否するとか、これだからお貴族さまはよお」

「どうか、俺たち平民なんて、路傍の石と同等なのだろ。あー、悲しいよ、俺は」

「この傷ついた心を癒すには、お貴族さまからお布施いただかないとなあ」

要は金をよこせ、と彼らは暗に言つているようだ。アリストルはチラリとある方向に視線を走らせたあと、ゆっくりと口を開く。

「断る」

「つ、なんだと！」

強い拒絶に、一瞬男たちは呆けたものの、すぐに赤ら顔で気色ばむ。激高した彼らは、白い服の

男を庇うように立つアリストルの腕を掴み、それぞれに怒つて叫んでいた。

悪意ある声がアリストルに集中する。それはかつての断罪を思い出させ、たまらず身を竦ませてしまった。背後に庇つている男も恐怖からか震えているのを感じた。

周囲にいた無害な人たちは、自分たちも巻き込まれたくない、見て見ぬふりをする。噴水広場はあつという間に無頼漢どもの独壇場と化していた。

万事休すといった所で、男たちの身柄は瞬く間に、ハイノが采配した騎士たちによつて制圧されてしまつた。

「アリストル様！」

ハイノの声が聞こえ振り返ると、焦つたように駆けてくる姿が認められる。いつもは無表情で冷靜沈着な彼の姿に、アリストルは瞠目した。

「大丈夫ですか、アリストル様！」

「え、ええ。特に怪我はありませんが……」

ゴロツキに掴まれた腕がわずかに痛むが、泣きそうに顔を歪めるハイノの心痛を増やすつもりはない。あえて言葉にしなかつた。

「私がもつと早く指示を出していたら……」

「いえ。結果的にこの時機で良かったです。僕に集中していたおかげで、捕まえることができましたので」

下手をしたら、彼らが逃げ出してしまう可能性だつてあつた。そうなればまた同じような事件が

起こつてしまふ可能性が高い。多少の犠牲があつても、結果が良ければ問題ないだろう。

「それより、僕よりも彼のほうが……大丈夫ですか」

「はい。助けてくれてありがとうございます」

ふ、と上げた神徒の顔を見たアリストルとハイノは息を呑む。それは今、王城にいるはずのユリウスと瓜二つだつたから。騎士も神徒がユリウスと似てゐることに気づいたのだろう。背後で「ユリウス殿下!？」と驚愕してゐる声が聞こえる。王宮にいるはずの王族がこんな市井にいるとは普通考えないだろう。視察が入つているとも知らされてはいないだろうし。そもそも当のユリウスは、婚約式のあと城に帰つたことを騎士たちも知つてゐるはずだ。

「あの……？」

自分を見て驚く周囲に、神徒はオロオロと戸惑つてゐる。アリストルは緩く首を振つて口を開いた。

「つ、この方は殿下じゃありません。遠回りになりますが、この方を診療所に連れて行きます」「アリストル様」

「ですが……。アリストル様を王宮までお送りするのが……」

ハイノや騎士たちがアリストルの行動を諫めてくる。だが、ここで騎士に引き渡すつもりはなく、毅然とした態度で言い放つた。

「準王族である僕が、このまま王都に住まう方を放置して、王宮に行くことはできません。それに、民がいるからこそ、貴族も貴族として成り立つてゐるのですから」

本当は王族も、と言いたかつたがさすがに不敬だと思い、言葉を飲み込む。厳しい顔で言い含め

るアリストルへ、ハイノは小さく吐息を落としてから提案してきた。

「分かりました。この方もそうですが、アリストル様も診ていただきましょう」

「僕は大丈夫ですが」

「今は良くてもあとから何があるか分かりません。念のため診ていただきましょう」
ハイノの言い分は理解できる。前の時にそういう経験を何度かしたことがある。小さな怪我があとから化膿して、発熱で苦しい思いをした。

「そう……ですね。ハイノ様の言うようにします」

固辞し続けて、ハイノにまた悪印象を与えるのは憚はばかられる。承諾に頷くと、騎士たちがそれぞれの役割に走った。

◇ ◇ ◇

診療所は噴水広場から割と近い場所に建っていた。騎士が先触れを出しておかけで、アリストルと神徒の男性も、待たされることなく診察を受けることができた。

アリストルの腕には男たちが力任せに掴んだせいで、軽く痣あができていたものの、特に治療は必要ないとのこと。もし異変が起きたら、王宮医に診てもらうようにと、緊張に顔を強張らせた医師から告げられた。

「大きな怪我でなくて安心しました」

「はい」

神徒の治療が終わるまで、アリストルとハイノは診療所の客間で待つことになつた。騎士たちは診療所の外で警備をしているらしい。

アリストルはハイノが淹いてくれたお茶を飲もうと、テーブルの上にあるカップを持ち上げる。微かに腕に痛みが走るが、顔には出さずに湯気の立つカップに唇を寄せた。喉を通る爽やかな香り。思わずほうと息をこぼす。

「お口に合いましたか」

正面から聞こえたハイノからの問いかけに「はい」と頷く。きっとユリウスにも頻繁に淹れていのだろう。慣れた所作で淹れたお茶は、先ほどの疲れを癒すに十分な美味しさだった。

「とても美味しいです。ハイノ様は器用な方なのですね」

「ありがとうございます。ユリウス殿下は放つておくと、飲食すら面倒臭くなるので、致し方なく会得した感じですね」

苦笑するハイノに、アリストルは淡く微笑む。彼とこんな風に雑談ができるなんて。
(前の頃も歩み寄れば、何かが変わつたのだろうか)

脳裏に浮かんだ言葉を、すぐに振り払う。ハイノはユリウスに心酔していたが、かの男爵令嬢へ恋慕を抱いていたのに、アリストルは気づいていた。泣きそうな、愛おしさが込み上げそうな表情で、ハイノは男爵令嬢を見ていた。その眼差しはアリストルがユリウスを見ている表情と同じだった。だからこそユリウスの暴挙を止めることはなかつたし、アリストルを放逐することにも手を貸

した。

アリストルの脳裏に、ハイノと一緒に馬車に乗った記憶が蘇る。

（今の優しい彼が、夢か幻なのではと、疑う自分がいる）

こちらを見て微笑むハイノの視線から、思わず目を背けていた。

気まずさを感じる室内に、扉の開く音が聞こえる。アリストルとハイノも、音のする方へ顔を移すと、騎士に付き添われた神徒が立っていた。騎士の顔が強張っているのは、ユリウスにそつくりなせいだろう。そんな事を知らない神徒は、少し首を傾げながら中へと入ってきた。

ハイノが立ち、怪我人の神徒をエスコートして、今まで自分が座っていた場所を勧めている。その足でお茶を淹れる支度を始めているのを横目に、アリストルは正面に座る美しい人を眺めた。白銀よりも白に近い髪は腰まであり、サラサラと音がしそうだ。春色の空の瞳はまっすぐにアリストルを見つめ、目が合うとふわりと微笑んでいる。ユリウスに似ているが、彼はこんなに緩やかな笑みを浮かべない。

「お怪我の具合は大丈夫でしたか？」

「ええ、打撲と診断されました、薬をいただいたので大丈夫です」

「良かったです。あ、申し遅れました、わたしはエルネスト侯爵が長男のアリストルと申します」本来なら、侯爵子息である自分から身上を告げることはしない。だが例外はある。教会の者に対するは、彼らのほうの地位が上とされる。それは王族も同等だ。

この国の成り立ちが、神が創造したとされているから。故に王族や貴族を含めた国民は、神の使徒である彼らに敬意をはらう。

「しかし、蹴られるとあんなに痛いなんて思いもよりませんでした」

袖からチラリと見える包帯や片頬を覆うガーゼといった、どう見ても怪我人という様相をした神徒は、へラリと笑つて感想を述べる。感想が斜め上なのは、ハイノのなんとも言えない表情で分かる。きっとアリストルも同じような顔をしているだろう。

「ですが、死ぬまでとならなかつたのは、皆様のおかげです。ありがとうございます」

「いいえ。こちらこそ、もつと早くお助けできず、申し訳ありません」

丁寧に感謝を告げる神徒に、アリストルも間に合わなかつたことについて詫びをする。

しばらく応戦合戦が続いたが、ハイノが制止してくれ、お互い困ったように笑つてしまつた。

「今更ですが、私は創世神教会で司教を賜つているエルレと申します」

「司教様……」

金糸の刺繡が入り、質の良い祭服を着ていたから、それなりに地位が高い人だと予想していた。

まさか司教だとは、と驚くアリストルだが、ふと疑問が湧く。今日、ユリウスと交わした婚約式に立ち会つたのは、大聖堂の司教だつた。他にも司教がいても可笑しくない。だが白い髪と青い瞳、国の王太子に似たエルレなら、噂になつてもいいはずだ。つまり彼は王都の教会に在籍していないのでは。アリストルは頭の中が疑問に占められていた。

「この王都外れの小さな教会に在籍しています。美しいステンドグラスが見ものなので、よろしければ是非」

ニコニコと話すエルレをよそに、アリストルの心臓は激しく高鳴った。

（街の外れにある教会……それって）

美しいステンドグラスとくれば、アリストルが命を終えた、あの廢礼拝堂なのでは。ドツドツと跳ねる心臓を、服の上から必死で押さえ口を開く。

「あ……の礼拝堂は、廢墟になつてゐるのでは」

「いいえ。普通に機能していますよ。多少古くて不便はありますけどね」

え、と悲鳴をあげなかつた程度には常識が残つていたようだ。アリストルが記憶している廢教会とは別の教会なのだろう。自分に言い聞かせ、再度教会の場所を尋ねたものの、エルレから返ってきた答えは、アリストルが死を迎えたあの教会だと言う。

（そんな……何故……）

記憶の齟齬に、アリストルは混乱して血の気が引く。

当時のアリストルが死んだ時を考えても、少なくとも数十年以上使用されていないだろうというボロボロ具合だった。つまり、現時点での教会は廢墟になつてゐるはずだ。一体どういうことだと手で頭を抱えているさなか、建物の外から馬の嘶きと喧騒が耳に伝わってきた。誰か急患でも來たのだろうか。

「なんでしょうか。アリストル様、念のため様子を見てきます」

「は、はい」

動搖しながらもハイノに返したアリストルの心は、外に意識を向ける余裕はない。

扉の向こうに消えるハイノを、ぼんやりと見送る。厚いドア越しに何かを言い争う気配を感じるが、今のアリストルの心情は、それどころではない。混乱以上に、自分の知つてゐる世界との差異に恐怖すら感じていた。

「アリス！」

激しく開かれたドアと共に、アリストルの名を叫ぶ声が部屋に響く。現れたのは、陽に透けそうな金の髪と、春空の瞳を険しくしたユリウスだった。

本来いるべきではない人がいるという状況を前にすると、人というのは思考が停止するものらしい。

「ユリウス殿下!?」

「アリス。大丈夫？」

やつと目の前の人名を叫ぶことができた頃には、彼の人にギュウと抱きしめられた後だった。長い腕がアリストルの体に絡みつき、あまりの強さに肺から空気が押し出される。苦しいと背中をタップするものの、ユリウスはアリストルの首筋に顔を埋めて、更に拘束が強くなる。鼻腔に、以前は遠く風に乗つて香る程度のユリウスの匂いが、苦しくなるほど濃厚に香つた。

前の生では、決してここまで密着することはなかつた。だから予想外の状況に、心臓が激しく暴かれまわる。

「あの、殿下。できれば離していただけだと……」

「やだ。騎士の話ではゴロツキに、襲われかけたというじゃないか」

「いえ、それは」

「アリスは可愛いのだから、そんな者たちに近づくと攫われてしまうよ」

甘い言葉を囁かれ、アリストルの顔にカツと熱が集まる。

アリストルの言い分を封じてユリウスは強い口調で諭してくる。前のユリウスとの差に目を白黒させていると、首筋に何か濡れたような感触がして、肩が微かに跳ねた。

「え、ユリ……んつ」

ヒヤリ、と空気が触れた場所に冷たさを感じる。困惑の中で更なる驚きが襲ってきて、アリストルは思わずユリウスにしがみつく。首筋に顔を伏せたユリウスが、「アリスはどこも甘いな」とぐもつたような声で告げ、再びアリストルの首筋を下から上へと濡らしていく。

濡れた感覚の原因が、ユリウスが舐めたことだと気づき、アリストルの熱は全身に広がっていく。腰を撫でられ、そこからジンと甘い痺れが走る。自然と吐息がこぼれ、頭の中が酩酊していく。これまでユリウスだけではなく、誰とも触れ合うことのなかつたアリストルの脳内は、突如訪れた性的な接触で混乱の極みに落ちていきそうになる。

「ひ、……うつ」

「……ふふつ、可愛い、アリス」

腰の上をユリウスの大きな手が這う。自然と息が乱れ、抵抗を奪われる。

腰のあたりがゾワツとし、たまらず体をビクンと震わせると、ユリウスが囁くように笑う。性的な匂いをさせる態度に、ユリウスが意地悪をしたのだと分かった。

「で、殿下……戯れは……んつ」

注意をするものの、またも首筋を大きく舐められ、喉から艶めかしい声が漏れてしまう。前の生から性的な接触を経験したことがなく、とんでもない不敬を働いてしまったのかと、全身の血が凍りつくようになってしまった。

ボロリ、と涙が紅潮した頬の上を転がっていく。

「ああ……泣かないで、アリストル。君が可愛くて、ついついやりすぎてしまつたようだ」

困った顔でアリストルの目尻を指で拭うユリウスに、自分が泣いていたのだと知る。たかがこんな事で泣くなんて、ユリウスに嫌悪されてしまつたらどうしよう、とアリストルは慌てて謝罪を口にする。

「いいえ。いいえ、殿下。僕こそ無礼を……」

「アリス、私のことはユリウスって呼んで？ 殿下って言わると、壁を感じて寂しいな」

涙で湿った頬を撫でながら、呼び方について訂正をされたけど、さすがに承服しかねる懇願だった。いくら正式な婚約者であつても婚姻するまではユリウスは王族で、アリストルは侯爵子息なのだ。とはいえるが、強固に反発するのも、優しくなつた彼の気持ちを害するのでは。

「じや……じやあ、『ユリウス様』と呼んでいいですか？」

どんな反応が返つてくるか不安になりながら、ユリウスを見上げて提案すると。

「アリスは恥ずかしがり屋だから仕方ないね。じゃあ、慣れるまで、それでいいよ」

春空の瞳を細めて、アリストルの頬に唇を落としてきた。チュッ、と頬のあたりで弾ける音がす

る。それがキスだと気づき、全身の血が沸いたように熱くなつた。

甘すぎるユリウスの行動が恥ずかしくて、たまらずユリウスの胸に顔を隠す。耳にユリウスの鼓動が規則正しく伝わる。自分の心臓は激しく高鳴つているというのに、周囲の目があつても気にする様子のないユリウスに感心した。

「照れているアリス可愛い」

と、頭に何度もキスしてくるユリウス。アリストルは羞恥で、体の中で熱が暴走しそうだ。

この人は自分が知つていてるユリウスなのだろうか。春の空色の瞳を凍てつかせ、睨んできた婚約者と同じ人なのだろうか。男爵令嬢の肩を抱き、感情もなく切り捨てた殿下なのだろうか。

同じ時間軸にいるはずなのに、別の世界にいるかのような感覚に混乱していると、「なにをやっているのですか」と咎めるような声が聞こえてきた。

「なんだ、ハイノ。婚約者と親交を深めているのに、邪魔をするな」

チラツと声がした方を見てみると、開かれた扉にもたれるようにして、腕を組み不機嫌な顔をしたハイノが立つていた。ハイノの脇に立つ騎士たちは、みな赤面であさつての方向に顔を背けている。中には前かがみがちな騎士もいた。

「愛おしくて仕方ないのは理解しますが、ここはあなたの自室じゃないんです。人目があるのを忘れないでください」

「こんなに綺麗で、可愛いアリスを見せびらかせたいに決まつているじゃないか！ あ、でも、潤んだ瞳で艶っぽいアリスを誰かに見せるのは却下だな。というか、ずっとアリスは私の顔だけを見

て過ごせばいいな」

「え……、あの、ちょっと……」

「早速王宮に戻つたら、アリスの部屋を、私の部屋の隣に移してもらわなくては！」

「ええ？」

「落ち着きましよう。暴走しすぎです、殿下」

すでにアリストルの部屋は整つていてるはずだ。ユリウスの住む王子宮から離れた貴賓室。王族教育をする教師たちが来るのに利便性が良く、婚前に淫らな関係とならないようにと配慮された配置だつた。

前のユリウスは貴賓室に近づくことはなかつたし、アリストルも王族教育に忙しかつた。婚約者のにすれ違ひの関係というのだが、周囲の認識だつた。

今回も前と同じなら貴賓室になると思つていてるのに、ユリウスからの提案に度肝を抜かれる。

「無理を言わないでください。既に部屋は準備が済んでいいそうですし、結婚するまでは純潔を守る必要があるのでですよ」

忘れたわけではないでしよう？ と濃紺の髪を揺らし、灰青の瞳が呆れたように細められる。ユリウスもハイノの軽口を咎めず、アリストルをギュウギュウと抱きしめている。きっと、昔から二人の関係は主従というより、古くからの親友という色が強かつたのを記憶している。

家族愛に恵まれなかつたアリストルは少しだけ羨ましく感じながらも、二人のやり取りに戸惑つていた。

(ユリウス殿下もだけど、ハイノ様からも距離を置きたいのに)

男爵令嬢の言葉を疑わず、ハイノもかつてのアリストルに対して良い感情を持つていなかった。ユリウスに近寄ろうとすれば、厳しい言葉で遠ざけ、アリストルの証言を最後まで信じてくれなかつた。そうして実家から少しだけのお金で渡され泣き喚くアリストルを馬車に押し込み、平民街の入り口でアリストルを放逐した。あの冷徹な表情を今でも忘れない。

だからユリウスだけでなくハイノまで前と違う態度に、アリストルは困惑し、視線を部屋の中に巡らせる。が、先ほどまでいたはずのエルレの姿がどこにもない。

テーブルにはまだ湯気を摇らすカップがふたつ並んでいる。いつの間に彼は退室したのだろうか。

「あ、あの、ユリウスでん……様」

「ん？ どうしたの、可愛いアリス」

「僕と一緒に司教様がいらしたのですが」

「司教って？」

甘い言葉で耳を傾けていたユリウスだつたが、アリストルの疑問に眉をひそめる。ハイノも同じ表情で首を傾げていた。

「いや、私がこの部屋に飛び込んだ時には、アリスだけだつたけど？」

「わたしも殿下が中に飛び込んで程なくして部屋に来ましたが……不思議ですね」

「……」

白髪と春空色の目のユリウスに似た神徒が煙のようく消えてしまつた。

「一体どういうことなの？」不安になつたアリストルは、ユリウスの外套を強く握り締めていた。

◇ ◇ ◇

馬車に再び揺られながら、アリストルは忽然と消えたエルレのことを考える。

(場が騒然としていたから、人ひとりが退出しても気づかなかつた、と言われても納得はできる。だけど、ドアにはハイノ様だけでなく騎士もいた。そんな中、ユリウス殿下に似た人物が近くを通つて、あつさり見逃すことがあるのだろうか)

思案に暮れるものの、別のことで考へが霧散してしまつ。

「あ、あの……」

「ん？ なんだい？」

「お、下ろしてください……」

「だあめ」

甘く微笑むユリウスは反論とともに、膝の上に座つてゐるアリストルの腰へと回した腕に力を込めてきた。

(ど……どうして勃つてゐるの……！)

お腹に回された腕が一層強くなり、首筋にユリウスの吐息がかかる。それだけでなく、臀部に何か硬い物が押し付けられ、相手が王族でなかつたら殴つていた。そんな暴挙に出る勇気はなかつた

けども、恥ずかしい物は恥ずかしいし、必死な抵抗を止めるつもりはなかつた。

「ハ…ハイン様…」

助けて欲しいと目で訴えたものの、すぐに「アリスは余所見しちやダメだよ」と、ユリウスの指がアリストルの顎を捕らえてしまった。

ハインの冷ややかな視線に晒され続けるのは勘弁してもらいたい、とアリストルは両手で顔を覆いたかつたが、ユリウスの腕に包まれているためそれもできない。

（この人は、僕の知っているユリウス殿下なのだろうか）

前のユリウスと余りにも違う態度に、どうしたらいいのか戸惑うばかりだった。

王都の構造は三層に分かれる。

広大な森を背にして、半円状に王宮を含めた王城があり、貴族が立ち入れるのは一部の施設のみとなつていて。次に王城を囲むようにして貴族街が存在し、王城に近ければ近いほど高位貴族の王都での住まいとなつていて。基本的には貴族は領地を賜つており、そちらを管理している貴族が多く存在する。そのため、王都の住まいに常駐しているのは、領地を賜つていない貴族か、王城で仕事をしている文官または騎士たちだ。

そして、貴族街と大きな川を挟んで存在するのが平民街だ。唯一の交通手段は日中だけ開放される橋で、前の時にハインによつて放逐された際にも、その橋を通つたのを覚えている。平民街から貴族街に入る時は通行証が必須だと聞いたことがある。だから前の生の時は、何度か橋を渡つて戻

ろうとしたものの、橋で警備している騎士によつて阻まれ絶望したのは記憶に残つていた。

相変わらずアリストルの腰のあたりを、ユリウスの手が這い回る。ふしだらな熱が窓の外に意識を向けてかわすことにした。

平民街は今日も人で賑わつていて。先程までの騒動が嘘のように、買い物を楽しむ女性や、客引きをしている男性。道を子供たちが走り回り、ベンチに座る老人は好々爺の笑みで眺める。笑顔で溢れたその場所は、とても、とても優しい午後の景色。

（だけど、前の時は、僕にとつて地獄の場所だった）

馬車が、平民街と貴族街を繋ぐ橋を、渡るのを眺めていたその時。波打つ栗色の髪の女性の姿が人波の合間から見え、アリストルの心臓がドキリと高鳴る。

（イレーネ・クーニツツ男爵令嬢）

数人の男女に囲まれて楽しげに笑う彼女は、一年後には自分を抱きしめるユリウスと結ばれる運命にある。そして謂れもない罪でアリストルを断罪し、アリストルを排除するため、無罪の者を平民に落とした。

（僕はただ、貴族子息として、同じ貴族令嬢の彼女に苦言を呈しただけだ）

夜会や茶会で、彼女は令嬢らしくない態度で、様々な貴族子息にまとわりついた。中には婚約者がいる者にまで近寄り、イレーネはだんだんと奔放になつていつた。

アリストルはただ、王太子の婚約者という立場から、イレーネに注意しただけ。それなのに、彼女を囲う男たちはイレーネ以外の諫言に耳を貸さず、諫めた者を糾弾していた。

ユリウスもイレーネに心酔し、没交渉だつたアリストルを悪とみなし、不安定な立場を更に追い詰めていった。

（そして、殿下主催の夜会で、僕は何もかもを奪われ、捨てられた）

否定に叫んだ。自分は危害など加えていないと、喉が嗄れるまで訴えた。しかしイレーネを庇う男たちはアリストルの言葉を信じず、ユリウスの采配で、即刻市井へと捨てるよう命令したのだ。

秋も深まる初冬のある夜の出来事だつた。

（もう……あんな辛く苦しい日々の果てに死にたくない）

孤独感が蘇り、胸が痛く、叫びそうになるのを、唇を強く噛み締め耐える。

噛んだ唇から血の味がしても、何度も「まだ時間はある」と自分に言い聞かせた。

「アリスト？」

「え？」

「どうして泣いているの？」

顎を掬い上げられ、ユリウスと視線を交わす。春空の瞳は、怪訝な色に揺れている。ユリウスの言うとおり、彼の姿が滲んでいたことで、自分が泣いていたのに気づく。だが尋ねられた理由を口にできない。

言葉にしてしまつたら、あの辛かつた日々で息が苦しくなってしまうから。だから。

「恥ずかしくて……」

と、ユリウスもハイノも納得できないだろう理由しか言えなかつた。

ユリウスはそれ以上の追及はせず、「そうか」とだけこぼして、アリストルを隣におろしてくれた。アリストルの様子を不審に思いながらも、何も問いたださうとしないユリウスの優しさに、前の生の彼もこうだつたらと詮無きことを考えていた。

気まずい空気を乗せた馬車は橋を渡り、貴族街を抜け、王城の門をくぐり王宮へとたどり着いた。アリストルは下を向き、カラカラと車輪が回る音だけに耳を傾ける。

（また同じ時が始まる……）

俯くアリストルは、ユリウスとハイノがジッと見つめていることに気づかなかつた——

高い壁に囲まれた王城は、いくつかの塔が立つ立派な城が目を引く。

これから行く王宮や、ユリウスの住まう王太子宮は王城の後方に建つており、行くにはいくつもの衛兵たちの許可が必要となる。

前回も、おそらく今回も、アリストルが与えられる部屋は、王城の中にある水晶宮の一室だらう。そこは王族が住む宮からは離れているが、来賓が泊まるために警備はかなり厳重だつた。準王族となつたアリストルの身分は、賓客と同等なのは前の生で学んで知つていた。

窓に面した庭は四季折々の花で溢れ、見る人の目を楽しませる。素晴らしい場所だ。前の生も勉強に疲れた時は庭に出て、甘い花の香りに何度も癒された。あの場所なら慣れているのもあつて、そこまで緊張はないだらうと思つていた——が。

「——え？」

時折、慈善活動で出入りしていた水晶宮の門扉が、目の前で通り過ぎて行くのに気づき、アリストは変な声が出てしまう。

馬車はそのまま王宮の奥へと進み、アリストの思考は困惑に揺れる。

「ゆ、ユリウス様、どこに」

疑問をそのまま唇に乗せて問いかける。

ユリウスが目を細めてアリストへと手を伸ばしてきたものの、過去の記憶に囚われていたせいか、思わず身を竦ませてしまった。

「今日は疲れているだろうから、私の宮……月光宮で休んでもらうことにしてたよ」

微笑んで話すユリウスへ、アリストは目だけでなく、口も丸くすることしかできなかつた。

二 月光宮

白樺の森に囲まれた月光宮は静寂を湛え、睡蓮の池がある以外、どこか寂しさを感じる場所だつた。アリストは水面から浮かぶように、ふわりと眠りから覚める。見知らぬ天井画に戸惑つたもの、すぐにここが水晶宮ではないことに気づく。まだ眠気の残る体を起こし、天幕が下りた布越しに、部屋の中を透かし見た。

綺麗に整えられた客間は、どこか寒々しい。その要因は質素な家具が王太子の宮にしては少ないからだ。

「アリスト様、おはようございます。起きていらっしゃいますか」

控えめなノックのあとに、ハイノの声が問いかけてくる。アリストは「はい、起きています」とすぐさま返答すると、失礼しますと前置きをしてハイノが入室してきた。その手にトレイがあり、洗顔用ボウルと水差しが載っている。

（公爵令息で、殿下の腹心が、侍従のようなことをしているなんて）

驚きで目を見張り、アリストは慌ててベッドから降りると、ハイノへ駆け寄つた。

「おはようございます、ハイノ様。僕が持ちますので」

アリストはハイノの持つトレイへと手を伸ばすが「これも私の仕事なので」と、やんわり拒否

をされてしまった。

「ですが」

「ユリウス殿下の伴侶となるアリストル様も、同じく仕える主になります。なので、気になさらないでください」

毅然と言い放たれ、アリストルは渋々ながら頷くしかできなかつた。

身支度を整え、ハイノの案内でやつてきたのは、硝子の部屋ガラスだった。

「これは温室……ですか」

天井や壁も歪みの少ない硝子で覆われた室内は、射し込む陽光でとても明るい。ユリウスは部屋の中心に設置されたテーブルに居た。アリストルの姿を認めるに嬉しそうに立ち上がる。紺色のフロックコートには銀糸の模様が控えめにあり、ユリウスの淡い金の髪にとても映えていた。

「アリス、おはよう。よく眠れた?」

「殿下、おはようございます。おかげさまで、十分休むことができました」

金の髪が陽に透け、神々しさに目を眇めていると、ユリウスから「殿下じゃないでしょ」と咎められる。

「ユリウス、つて呼んで……ね」

長い指がアリストルの頬を撫で、朝から淫猥いんわいな匂いを感じさせる。だがゴホンとハイノがわざとらしい咳をし、色づいた空気がパッと霧散していった。

「殿下、色ボケするのは別の日にお願いします。アリストル様、どうぞこちらにお座りください」「は、はい」

逃げるようにユリウスから距離を取り、ハイノが示した椅子に素早く腰を下ろす。ユリウスは苦々しい顔でハイノを睨んだあと、チッと小さく舌打ちをしていた。とても王太子がやる行動ではないが、下手に藪やぶを突く気にならず、静観することにした。

ハイノの配膳でテーブルに朝食が並ぶ。ライ麦のパンが籠に盛られ、削りたてのチーズとブルストが数種、皿に並ぶ。エッグスタンドにゆで卵が立ち、カップから綺麗な水色のお茶が湯気を立てていた。

(この状況に鑑みて、僕はまだ恵まれていたのかな)

貴族家庭でよく見る朝食。だが、アリストルには豪華すぎる食事だった。ただ、お茶以外は全て冷たくなつていた。それは王太子が食すに適かない物だ。いくら毒見で食事が冷めることを理解しているものの、この冷たさは異常に感じた。

エルネスト侯爵家内において、アリストルという存在は、冷遇されるのが当然だと思われていた。実の父から一度たりとも愛情を与えられず、全て義弟に注がれていた。食卓すら共にしたことがなく、いつも離れてひとり寂しく食べていた。使用人と変わらぬ質素な食事を。それでも食べることができたのは幸いといえよう。体罰もなく、一定の教育を受けることを許されていたから。

(王妃の実家……フリューリング公爵から、エルネスト侯爵子息をユリウス殿下に嫁がせることを告げられ、父は義弟ではなく自分を差し出した。不要な自分を捨てるいい機会だと感じたわけだ)